

チャラカ・サンヒターのプラーナ説Ⅱ —サーンキヤ学派のプラーナ説との比較考察—

長 友 泰 潤

(哲学研究室)

(2009年1月28日受理)

On the theory of Prāṇa in Carakasamhitā

Taijun NAGATOMO

Laboratory of Philosophy, Minamikyushu University,

Takanabe, Miyazaki 884-0003, Japan

(Accepted : January 28, 2009)

Summary

In the view of Carakasamhitā (CS), Vāta (or Vayu) consists of prāṇa, udāṇa, samāna, apāṇa and vyāna. Vāta brings the object perceived by the five sense organs and manas to the ātman. So internal organs like the manas and buddhi, have in common the function vāyu. The internal organs are connected to the five sense organs by this function. And the prāṇa plays an important role in the maintenance of the body and all the sense organs.

It is conducive to good health, improvement of strength and complexion, luster, growth, and complexion in addition to, attainment of knowledge and longevity. Outside the body, it brings about cohesiveness for, and movement in the sun, moon, stars and planet, Vāyu sustains the earth also.

In the view of the two commentaries on Sāṅkhyakārikā (SK), that are Sāṅkhyatattvakaumḍī (TK) and Gaudapaḍabhāṣya (GBh), present a view that recognizes two classes of sense-organs, i.e., the external ones and the internal ones. The external organs are the five sense organs and the internal organs are manas, ahaṅkāra, and buddhi. These three internal organs have special function. The manas assimilates the immediate impressions of the objects provided by the external senses, and the ahaṅkāra apperceives these impressions, after which buddhi makes a determination upon them. These internal organs have in common the function prāṇa. The internal organs are connected to the five sense organs by this function. And the prāṇa plays an important role in the maintenance of the body and all the sense organs. But these two commentaries on SK have no mention of the relation between prāṇa and the natural phenomena like the sun and earth.

According to the above investigation, it can be maintained that there is some difference between the view of prāṇa in the two commentaries on SK and the view presented in the CS. In the CS, prāṇa brings about cohesiveness and movement among the sun, moon, stars and planet, while sustaining the earth also. However these two commentaries on SK, have no mention of the relationship between prāṇa and the natural phenomenon like the sun and earth.

Key words: Carakasamhitā, Sāṅkhyatattvakaumḍī, Gaudapaḍabhāṣya, prāṇa.

序

インド古典医学論書の一つであるチャラカ・サンヒターのプラーナについては、既に、マナス説との関連で検討した。本稿ではそのチャラカ・サンヒターのプラーナ説¹⁾と、チャラカ・サンヒターの見解に大きな影響を与え、類似点の多いサーンキヤ学派のプラーナ説とを詳細に比較検討し、チャラカ・サンヒターの医学書としての独自性とプラーナの役割について、さらに詳細に検討していきたい。

1. ガウダパーダバーシュヤのプラーナ説

まず、ガウダパーダのプラーナ説について見ていく。ガウダパーダはプラーナ等の五風について次のように述べている。

「プラーナ等の五風、プラーナ、アパーナ、サマーナ、ウダーナ、ヴヤーナという五風は、全ての感官に共通なる機能である。なぜなら、プラーナと名付ける風は、口鼻の内部を活動領域とする。その流動する働きは、十三種〔の作具〕にとっても、また、共通なる機能である。なぜなら、プラーナがある場合に、作具は生命を得る。また、プラーナは籠中の鳥の〔動くとき、籠も動く〕ように、全て〔の作具〕にとって活動を与える。」

prāṇādyā vāyavaḥ pañca // prāṇāpāna-
samānodānavyānā itī pañca vāyavaḥ
sarvendriyāṇaṃ sāmānyā vṛttīḥ/
yataḥ prāṇo nāma vāyuḥ mukhanāsika
antargocaraḥ, tasya yat spandanaṃ
karma tat trayodaśavidhasyāpi
samānyā vṛttīḥ/ sati prāṇe yasmāt
karaṇānāmātmalābha itī / prāṇo api
pañjaraśakunivat sarvasya calanaṃ
karotīti/²⁾

ここで、ガウダパーダは、プラーナはすべての感官に共通する機能であり、その流動する働きこそが、十三種の作具にとっても共通なる機能であるとする。籠の鳥が動くときに籠も動くように、プラーナがある場合に、作具は生命を得るとする。

さらにガウダパーダは、プラーナ、アパーナ、サマーナについて次のように述べている。

「吸入するがゆえに、プラーナという。同様に、去るが故に、アパーナという。この〔風の〕流動も、また、作具の共通なる機能である。同様に、サマーナ風は中央にあって、食物等を平等に配送するから、サマーナ風（平等の風の意味）という。そこに（中央に）おける流動は、作具に共通なる機能である。」

prāṇāt prāṇa ityucyate / tathā
apanayanādapānaḥ, tatra yat spandanaṃ
tadapi samānyavṛttir indriyasya /
tathā samāno madhyadeśavartī ya
āhārādīnāṃ samaṃ nayanāt samāno
vāyuḥ, tatra yat spandanaṃ tat
samānyakaraṇavṛttīḥ/³⁾

ここで、ガウダパーダは、プラーナ、アパーナ、サマーナの特徴について述べている。

プラーナは吸入するものであり、アパーナは去るものであり、サマーナは食物等を平等に配送するものである。

次に、残りの二風について説明し、五風を総括して次のように述べている。

「同様に、昇騰するがゆえに、増進するがゆえに、あるいは上に導くがゆえに、ウダーナと呼ぶ。それは臍の部分から頭の内部を、活動領域とする。ここでウダーナの流動は、一切の作具に共通なる機能である。さらに、身体に遍満し、また、体内を区分するのは、ヴヤーナである。あたかも、虚空のごとく身体遍満するがゆえに〔このように名付ける〕。この〔風の〕流動は、多数の作具の共通なる機能である。このように、これら五風は、共通なる作具の機能であることが、説明された。すなわち、十三種の作具にとって、共通なる機能という意味である。」

tathā ūrdhvārohaṇādutkarṣāt
unnayanādvā udāno nābhidesānan
mastakāntar gocaraḥ, tatra udāne
yat spandanaṃ tat sarvendriyāṇāṃ
samānyāvṛttiḥ /
kiṃ ca, śarīravāptirabhyantara
vibhāgaśca yena kriyate asau
śarīravāptyā ākāśavadyānaḥ,
tatra yat spandanaṃ tat karaṇajālasya
samānyā vṛttiriti / evamete pañca
vāyavaḥ samānyakaraṇavṛttiriti
vyākhyātāḥ, trayodaśavidhasyāpi
karaṇasamānyavṛttirityarthah//29//⁴⁾

ここで、ガウダパーダはウダーナは上に導くものであり、臍から頭にかけてを活動領域とし、ヴヤーナは身体に遍満するものと考えていたようである。

そして、以上の五風は十三種の作具にとって共通な機能であると総括する。

小 結

以上の検討から、次のようなことが知られた。すなわち、ガウダパーダはプラナーナ、アパーナ、サマーナ、ウダーナ、ヴヤーナの五つの風はすべての感官に共通する機能であり、その流動する働きこそが、十三種の作具にとっても共通なる機能であるとする。籠の鳥が動くときに籠も動くように、プラナーナがある場合に、作具は生命を得るとする。また、プラナーナ、アパーナ、サマーナ、ウダーナ、ヴヤーナの特徴については、プラナーナは吸入するものであり、アパーナは去るものであり、サマーナは食物等を平等に配送するものであるとされる。さらに、ウダーナは上に導くものであり、臍から頭にかけてを活動領域とし、ヴヤーナ身体に遍満するものと考えていたようである。そして、以上の五風は十三種の作具にとって共通な機能であると総括する。

2. タットヴァカウムディー（以下TK）のプラナーナ説

TKのプラナーナ説については、シャンカラ説との比較考察の中で取り上げた。そこでは、プラナーナについて次のような言及が見られる。

『『プラナーナ等の五風は、共通な作具の機能である。』とは、それが『共通であって、且つ作具の機能である』という意味である。三つの作具（即ち三つの内的器官）にとっても、五風は生命であり、機能である。それ（五風）があれば、〔この器官も〕存在し、それがなければ、〔これも〕存在しえないからである。この〔五風の〕中で、プラナーナは鼻先より心臓・臍〔を通過〕、足先に働き、アパーナは頸の関節・背・足・肛門・性器・脇に働く。サマーナは心臓・臍・一切の関節に働く。ウダーナは心臓・咽喉・口蓋・頭頂・眉間に働く。ヴヤーナは皮膚に働く。以上が五風である。』⁵⁾

ここでは、プラーナ等の五風がブッディ等の三つの内的器官に共通する機能として示されている。これは、上記のガウダパーダの、五風を十三種の作具に共通する機能とする説と異なっている。

さらに、TKは次のように述べている。

「保持されるものもまた、同様である。三内的器官にプラーナ等と称する〔共通〕の作用があり、それによって身体が〔保持される〕」⁶⁾

ここでは、プラーナ等の五風はマナス等の三内官の共通の特質とされ、また、身体を保持するものである。

小 結

TKによれば、プラーナ等の五風はブッディ等の三つの内的器官に共通する機能であり、この点では、十三種の作具に共通であるとするガウダパーダの説と異なる。また、五風は生命であり、それによって身体が保持される。そして、五風には機能する場所があり、プラーナは鼻先より心臓・臍を通して足先に働き、アパーナは頸の関節・背・足等に働き、サマーナは心臓・臍・一切の関節に働く。ウダーナは心臓・咽喉・口蓋等に働く。ヴァーナは皮膚に働く。これらの活動領域については、ガウダパーダのそれと少しは一致している。

3. チャラカ・サンヒターのプラーナ説

次に、上記のサーンキヤ学派のプラーナ説とチャラカ・サンヒターのプラーナ説を比較検討してみよう。

チャラカ・サンヒターでは、ヴァータ、すなわち風について次のように述べられている。身体中のヴァータは増大したり、鎮静したりするとされる。それによると、ヴァータは、乾燥・軽さ・冷たさ・激しさ・清さ・荒さ・空洞性をもたらすものによって増大し、湿り・重さ・温・滑らかさ・軟・密集性をもたらすものによって減少する。ヴァータは身体中で、増加したり減少したりするものと考えられていたようである。⁷⁾ ガウダパーダやTKのプラーナについての言及では、ヴァータという用語は用いられていないが、身体中で働く点では同じである。

次に、風と身体との関係については、ヴァータではなくヴァーユが使われているが、どちらも風を意味する。この風とはプラーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナの五種からなり、身体を保持するものとされる。そして、この風が正常な状態にある場合について述べられている。すなわち、風はマナスを制御し、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を認識主体の方へ運ぶものでもある。この風がマナスを制御し、すべての感官を活動させるという見解は、プラーナがブッディ、アハンカーラ、マナスの三つの内的器官に共通する機能とするTKの説よりも、すべての感官を含む十三種の作具に共通する機能とみるガウダパーダの説に近いものである。さらに、チャラカ・サンヒターの説では、風は身体の組織の様々な機能を有効に働かせ、病気から守り、身体を正常に保つ生命持続の原因とされている。⁸⁾ これは、TKの五風は生命であるという説に共通するものと考えられる。

また、風が正常ではなく、激化した状態にある場合についてチャラカ・サンヒターでは次のように述べられている。すなわち、体内で激化した風が、身体を様々な病気で苦しめ、体力・容色・健康・寿命を破壊し、マナスを混乱させ、すべての感官を阻害し、胎児を殺したり、奇形を生ぜしめたり、流産を誘発したり、恐怖・悲嘆・迷妄・消沈・妄語を生ぜしめ、生命（プラーナ）を閉塞させ、身体的、精神的病いの原因となるとされている。⁹⁾ このような詳細な説明は、ガウダパーダやTKのプラーナについての言及には見られないものである。

さらに、風が正常な状態の場合の自然界での働きについてチャラカ・サンヒターでは次のように述べられている。その時、大地を支え、火の燃焼を盛んにし、太陽・月・星宿・惑星の恒常な運行を設定し、雲を生じ、雨を降らせ、川の流れを促し、花を開かせ実を結ばせ、萌え出でるものを発芽させ、季節を分け、元素に様々な形をとらせ、元素の量と形状を顕現させ、種子を発芽させ、穀物を成長させ、湿潤を防ぎ、乾燥させ、形状の定まっていないうものに形状を賦与する。このように、風は大地を支えるものであり、

太陽や月、星の運行を含め、宇宙の運動変化、植物の生長や季節等の自然現象は風の働きであるとされている。¹⁰⁾

続けて、自然界での、激昂した状態の風の作用について述べられている。風は、山の頂上を揺り動かせ、樹木を根こそぎにし、海洋を波立たせ、湖水を氾濫させ、河を逆流させ、大地を揺り動かせ、雨雲を膨張させ、霧・雷鳴・砂塵・魚・蛙・蛇・灰燼・血・石・電光を生ずる。また六季節を破壊し、作物の不作をもたらす。生物に疫病を生じ、生類を滅亡させ、四つのユガの終末をもたらす、雲と太陽と風を生み出す。このように、風は大地を揺るがし、嵐を呼び、生物に疫病をもたらす、滅亡させるとされる。¹¹⁾ このような自然界とプラナーナについての詳細な説明は、ガウダパーダやTKのプラナーナについての言及には見られないものである。

さらに、チャラカ・サンヒターでは医学的な観点から、風について述べられている。すなわち、もし風がきわめて強力で激しく迅速な作用をし、緊急の対応を要するものであるということを知らなければ、突然激化した風に対応しなければならない医者は、どうして最初に死のおそれから〔患者を〕救うべく、前もってその風をおさえておくことができようか。また風をしかるべく賞賛することも、体力や容色の増進のため精力の増強と蓄積のため、知力の発揮のため、さらには寿命を最高度にのばすために役立つものである。医者は突然激化した風に対応しなければならない。また風を賞賛することは、体力の増進や寿命を延ばすのに役立つとされる。このように、医者は、風を、特に病気等の原因となる激化した風について知り、緊急に対応すべきものであると考えられていたようである。¹²⁾ このような病気とプラナーナについての詳細な説明は、ガウダパーダやTKのプラナーナについての言及には見られないものである。

結 論

上記の検討から、チャラカ・サンヒターのプラナーナ説とガウダパーダやTKのプラナーナ説との関係について次のようなことが知られた。まず、チャラカ・サンヒターでは風を表す言葉として、ヴァータが使われており、身体中のヴァータは、乾燥・軽さ・冷たさ・激しさ・清さ・荒さ・空洞性をもたらすものによって増大し、湿り・重さ・温・滑らかさ・軟・密集性をもたらすものによって減少する。つまり、ヴァータは身体中で、増加したり減少したりするものである。また、ヴァータではなく、同じく風を意味するヴァーユという言葉も使われ、それが、プラナーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナの五種からなり、身体を保持するものとされている。そして、この風が正常な状態にある場合には、それはマナスを制御し、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を認識主体の方へ運ぶ。さらに、風は身体の組織の様々な機能を有効に働かせ、病気から守り、身体を正常に保つ生命持続の原因とされる。また、風が体内で激化した場合には、マナスを混乱させ、感官を阻害し、また、身体的、精神的病いの原因となるとされている。このような詳細な説明は、ガウダパーダやTKのプラナーナについての言及には見られないものであるが、プラナーナが身体中で働き、マナスやすべての感官を活動させるとする点では、サーンキヤ学派の説と基本的に一致している。

しかし、チャラカ・サンヒターでは次のような言及も見られる。すなわち、風が正常な状態の場合の自然界での働きについては、その時、風は大地を支えるものであり、太陽や月、星の運行を含め、宇宙の運動変化、植物の生長や季節等の自然現象は風の働きであるとされている。また、風が激昂した状態の場合の働きについては、その時風は、大地を揺るがし、嵐を呼び、生物に疫病をもたらす、滅亡させるとされる。また、医学的な観点からの、風についての言及がある。すなわち、医者は突然激化した風に対応しなければならない。また風を賞賛することは、体力の増進や寿命を延ばすのに役立つとされる。医者は、風を、特に病気等の原因となる激化した風について知り、緊急に対応すべきものであると考えられていたようである。このような自然界とプラナーナとの関係や医学的な観点からの詳細な説明は、ガウダパーダやTKのプラナーナについての言及には見られないものであり、これらはチャラカ・サンヒター独自の見解と見ることができる。

摘 要

チャラカ・サンヒターでは、プラナーナは身体中でも働き、マナスやすべての感官を活動させるとしている。この点では、サーンキヤ学派の説と基本的に一致している。しかし、自然界とプラナーナとの関係や医学的な観点からの詳細な説明は、サーンキヤ学派であるガウダパーダやTKのプラナーナについての言及には見られないものであり、これらはチャラカ・サンヒター独自の見解と見ることができる。

注 記

- 1) 拙稿「チャラカ・サンヒターのプラナーナ説－シャンカラ説との比較研究－」南九州大学研究報告 人文社会科学編38号 (B) pp.29-35 2008.4.
- 2) Gauḍapādabhāṣya (以下GP) ed by Dr. T. G. Mainkar., Oriental Book Agency., Poona 1972 p.122.,ll.28-31 中村了昭『サーンキヤ哲学の研究』昭和57年 大東出版社 p.460参照.
- 3) GP. p.122.,l.31～p.123.,l.2 中村上掲書 pp.460-461参照.
- 4) GP. p.123.,ll.2-6 中村上掲書 p.461参照.
- 5) Sāṃkhyatattvakaumḍī (以下TK) ad Sāṃkhyakārikā (以下SK) 29 : Sāṃkhyatattvakaumḍī by OM Prakasha Pandeya., Chowkhamba Saraswatibhawan Varanasi 1981 p.123 金倉圓照『真理の月光』昭和59年 講談社 pp.168-169参照.
拙稿「シャンカラ・バーシュヤのマナス説－サーンキヤ学派との比較研究－」南九州大学研究報告 人文社会科学編37号 (B) pp.13-19 2007.4.
- 6) TK ad SK32 TK. p.128 金倉『真理の月光』 p.176参照.
- 7) Carakasamhitā (以下CS) ed by V. Bh. Sharma, Chowkhamba Sanskrit Studies, Varanasi1988. VOL. XCIV. Vol. I., p.236., ll. 10-16 矢野道雄『インド医学概論』(科学の名著第Ⅱ期) 昭和63年 朝日出版 p.84参照.
- 8) CS., p.237., ll. 15-20 矢野上掲書 p.85参照.
- 9) CS., p.237., l. 35～p.238., l. 3 矢野上掲書 p.86参照.
- 10) CS., p.238., ll. 11-15 矢野上掲書 p.86参照.
- 11) CS., p.238., ll. 28-33 矢野上掲書 p.86参照.
- 12) CS., p.240., ll. 120-23 矢野上掲書 p.86参照.